

三陸の海を放射能から守る

岩手の会

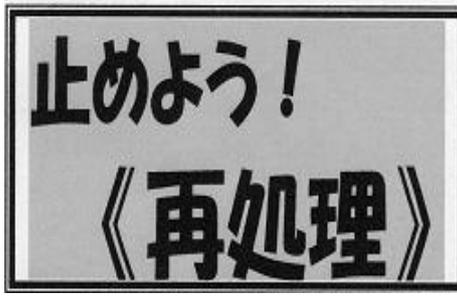
郵便振替 02240-5-102650

《岩手の環境 / R I 廃棄物 / 再処理》

http://homepage3.nifty.com/gatayann/env.htm

《まった再処理分庫》

http://briefcase.yahoo.co.jp/k_imag



天恵の海を守ろう!

2008 (平成20)年

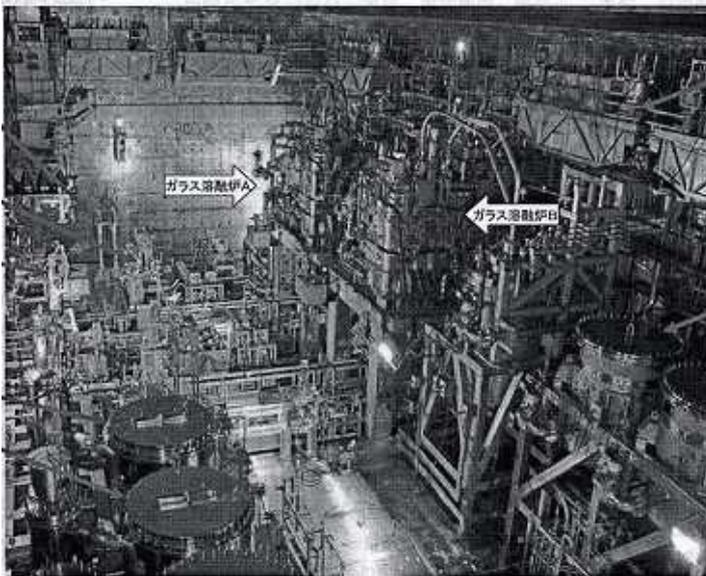
12月 12日

第62号

編集事務局 S.Oshida

TEL・FAX 019-623-1636

ガラス溶融炉 「白金族」で暗礁に アクティブ試験終了メド立たず



高レベル放射性廃液 ガラス固化装置のある部屋(セル)全景
強い放射能のため人間は入れず、作業は全て遠隔操作である。 日本原燃「平成20年10月1日報告書」6頁より

十月二日「せん断作業」全て終了

核燃再処理工場のアクティブ試験は海に空に放射能を放出しながら強行されてきました。肝心の高レベル廃液ガラス固化体製造のためのガラス溶融炉が、廃液中の白金族元素の炉底堆積が原因で、

運転不能に陥りました。原燃の報告書には最後の五体の製造時に、初めて白金族を含む不溶解残渣液を混入したとあり、これまでの試験が白金族濃度の高い廃液を除いた廃液であった事を明らかにしました。

溶融炉流下試験強行

十月十日～二十六日

七月の高レベル廃液を用いた溶融炉運転は、たった一日で流下停止となっていました。十月八日、保安院報告書提出後の十

日から二六日まで再々度

運転が実施されました。日本原燃は、「白金族元素堆積」による電気抵抗低下加熱不調を認めようとせず、早めにガラス成分のみを加える「洗浄運転」

や炉内攪拌を行い、さら

には高周波加熱器で炉底口のノズルを加熱する方式で行えば安定運転を確保出来るとしていました。しかし十月二六日、二七

十月二七日

「運転性能報告書」提出

この停止直後の十月二七日、日本原燃は、保安院に対して、「安定運転条件に基づく運転性能確認結果報告書」を提出し公開しました。同報告書には、「二二体目までは『不溶解残渣(ざんさ)廃液』を混合しない廃液を用い、二三体目から『白金族元素など不溶解残渣廃液』を混合した廃液を用いてデータを取得した」という記述がありました。

不完全な試験で済ませようと
した原燃

これまでの報告は、「白金族元素」を高濃度を含む不溶解残渣を除いた「高レベル廃液」を使用した試験データだったわけで、今回、当然加えるべき不溶解残渣を混ぜた廃液を使用したところ「二七体目から炉内判断指標が基準を超えたため回復運転に移行した」と報告しています。「白金族抜き」の運転報告では、「予備試験」に過ぎないものともいえ、国への許可申請書の条件とは異なり見

炉内状況判断指標が悪化し停止しました。

直しが必要です。ところが驚いたことに同報告書の「まとめ」では、今回の運転で「安定的に長期運転が出来ることを確認した」とあります。

保安院も「中途半端」と批判

児島社長「経過報告」に訂正

この報告書について原子力保安院サイクル規制課の石井康彦課長は、「不溶解残渣を混ぜた場合の適切な運転条件などが示されておらず、中途半端である」と批判しています。

十月三十一日、定例記者会見を行った日本原燃の児島社長は二十七日の「報告書」は最終報告ではなく「経過報告」であると

釈明しました。

欠陥ガラス固化体

半分強、製造

さらに、原燃は「六ヶ所のガラス固化体に想定外の化合物」が発見されたと発表しました。すなわち、昨年十一月に始めた固化体製造の熔融炉で通常より粘りけの少ない「水溶性の低粘性流体」が出来た。水に溶けた場合周辺への影響も懸念される。固化体六十体中三五本に含まれていた」と公表しました。地中処分には到底絶えられない不良品が作られていたわけです。

保安院交渉市民集会

集まった国会議員、市民



参議院議員会館 11.14

このような中、十一月十四日原子力政策「転換」議員懇談会主催の「ガラス固化体に関する保安院交渉集会」が開催されました。参議院議員会館の会場には近藤正道、福島瑞穂、金田誠一、下田敦子、大島九州男の各議員と市民約五十人が参集し、保

安院核燃料サイクル規制課金城慎司課長補佐らの見解を質しました。

先ず市民側から、これまでの「熔融炉ガラス固化試験」では「不溶解残渣」を入れない試験運転をしてきたわけであるが、専門委員はこのことを知っていたのか？「これでアクティブ試験」と言えるのか、など、厳しい質問が出されました。金城課長補佐は、報告を受け取ったとき「不可解なものと思った」と答えました。

このように、六ヶ所再処理工場のガラス熔融炉や固化体の技術的欠陥が明かになってきました。

アクティブ試験終了を三ヶ月延期

十一月二十五日、記者会見した児島伊佐美社長は、炉内の攪拌棒の挿入窓が開閉出来なくなったことや「竣工時期を来年二月まで延期」したことを報告しました。

山手千子の会 安全小委員「要望書」

十月三十一日「岩手の会」は核燃料サイクル安全小委員会の各委員へ「ガラス熔融炉」について、地元民の不安を受けとめ慎重な審議を行うこと、場合によっては再処理の見直しを求める事、との文書を送りました。

放射能なしの安全食品を！ 生活クラブ岩手半習会



澤井正子さん

生活クラブ岩手は、十二月四日「花巻・学び学園」で「六ヶ所工場って何？！まどうなってるの？」と題する講演会を開催し、原子力資料情報室の澤井正子さんのお話を聞きました。きれいな海で安全な海産物を生産し続けている重茂漁協の前川清理事の挨拶やメッセージビデオの鑑賞のあと



集まった約90人の会員・参加者

約二時間の講演を聞き、意見交換を行いました。

コラム 水めがね

アクティブ試験の「追試験」

再処理工場の高レベル廃液ガラス熔融炉の致命的欠陥が明らかになってきた。膨大な国費を投入して行った「アクティブ試験」は何回「追試験」を行っても合格の見込みが立ちそうもない。ここまで来れば国民に全てを明らかにして是非の判定を受けるべきだ。まず言える事は、使用済み核燃料に含まれている「白金族元素」があるかぎり、六

ヶ所の「直接通電ジュール加熱方式」では熔融炉の温度が上がらず安定運転の見通しが立たないということである。人がそばに寄ると即死する「超危険な放射性廃液」を作り出し、それを欠陥技術で「ガラス固化体」にしようというのは不合理である。「使用済み核燃料」は再処理せず使用済み燃料のまま保管することがベターである。急ぐ事はない。



この製造した「ガラス固化体」には、不良品が半分以上もあつたという。原燃報告書では「昨秋以来製造された六十体のうちの三五体に「想定外のモリブデンや硫黄、ナトリウムの化合物」が混入していた。低粘性で水に溶け出す可能性がある」と述べている。このような欠陥品では、地中に数万年も埋蔵して管理できるはずがない。さらに「

れまでのアクティブ試験で造ってしまった「高レベル放射性廃液」の蓄積の問題がある。液体状態で約二四〇立方メートルと推定される。液体状では絶えず冷却しなければ沸騰し、強い放射線による水の分解で水素が発生する。そして「工場直下に活断層」という学説が発表された。審査条件が変わったのだから「再処理」の立地審査をやり直し、再処理そのものを考え直すべき地点に立っている。

(尚)

盛岡の三大学 学生主催 「六ヶ所村ラプソデー」 上映会



十一月三日(日)、盛岡大、岩手大、県立大の学生有志が「六ヶ所村ラプソデー」上映会を岩手大学ホールで開催しました。二回の上映で、約百人が鑑賞しました。「岩手の会」の永田文夫世話人が最近の状況の説明を行いました。